SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.24
2019.08

SDGsで暮らし方を変える

Take Free

SDGsで暮らし方を変える

博報堂ＤＹホールディングスＣＳＲグループ推進担当部長　川廷昌弘氏

インタビュアー・文：片山清宏、片山久美

2019年7月。ニューヨーク国連本部。2030アジェンダのレビューとフォローアップを行う閣僚級の「ハイレベル政治フォーラム（High-level Political Forum = HLPF）」が毎年この時期に開催されている。HLPFでは世界の国々がSDGsの達成をめざすべく、様々なステークホルダーの関与のもとに、進捗状況を報告して経験を共有したり、SDGsを目標ごとにレビューしたりする。今年は4年に一度の節目であり、9月には首脳レベルでのSDGsサミットも開催される。SDGsにおいて日本が、そして世界が注目する重要な年なのである。

このHLPFの主要イベントである「Local2030」に、神奈川県の黒岩知事が国連からの招聘を受け登壇、「SDGs日本モデル」宣言を世界に向けて発信した。知事と同行し、この筋書きを描いた男の名は、川廷昌弘。

この筋書きには続きがある。8月に横浜で開催されたアフリカ開発会議（TICAD）のサイドイベントで、国連開発計画（UNDP）のアヒム・シュタイナー総裁と神奈川県の黒岩知事とのSOI（Statement of Intent）＝連携趣意書の調印式が行われた。この調印は、国連本部での黒岩知事のスピーチの翌日、シュタイナーUNDP総裁と黒岩知事との対談が大変に盛り上がり、その後川廷をはじめとした実務者レベルで調整して成立したものだ。

「この国連機関と日本の自治体との初めての協定は、未来への大きな意思決定であり、神奈川県での取り組みを世界に共有する新たな仕組みを構築していくことになります」

川廷は、SDGsを通して「企業」や「行政」という枠を超えたところに活動の幅を広げ続けている。一歩も二歩も先を行く彼

に、その先に見える未来を聞いてみた。

テニス漬けの学生時代

川廷の生まれ故郷は兵庫県芦屋市。静かな住宅街で、松韻や潮の香りはどことなく今住んでいる茅ヶ崎に似ているという。父親は脱サラをしたあと、テニス写真専門のフォトグラファーとなって世界を駆け回り、大会運営を学び、最終的には日本オリンピック委員会副会長まで歴任した。そんなことから、父に会えるのは年に数度で、ほぼ母子家庭の状態だった。自分自身は海外旅行に行ったことはなかったが、父が買ってくる世界中のお土産で旅行先の土地土地を想像したりした。

「カメラはいつもそばにあったし、写真を撮られること、撮ることは当たり前の日常でした。小さい頃はよくおやじのカメラを借りて鉄道写真を撮りに行っていましたね。カメラは趣味で、どちらかというと強く影響を受けたのはテニスの方が先でした」

学生時代はテニス漬けの日々。「学生時代は選手として毎日厳しい練習でしたが、大学生の時、学生ボランティアとして国対抗のテニスカップの舞台裏を経験させてもらったんです。自分もテニスを運営する側に回りたい、テニスを日本に定着させる仕事がしたいと思いました。その一心で今の会社の採用試験を受けようと思ったんですよ」

川廷が学生ボランティアとして参加した大会はテニスのW杯として知られるデビスカップ。熱戦が繰り広げられる試合の裏側でもまた、秒単位で刻々と変化する会場をパーフェクトに運営するスタッフたちの白熱した戦いの舞台が広がっていた。

大会のスポンサーはNEC、大会運営には博報堂が入っていた。最初はイベント会社かと思っていたが、調べて広告会社と知った。そして新しいアイデアで社会を動かすダイナミズムに強く惹かれて採用試験に申し込み、面接を受けに行った。もちろんこの段階ではさすがに、「テニスのイベントをやりたい!」の一心だけで博報堂に入れないことは理解していたので、スポーツで鍛錬された突破力と、旅で見聞きした地域への関心から思いついた「環境の演出」という言葉が面接で興味を持たれたりして、1986年春、博報堂の社員としての生活がスタートした。

働きながら写真家を志す

時はバブル景気に向かう時代。「24時間戦えますか」「企業戦士」などのキャッチフレーズが世にはびこるなか、川廷もまた、がむしゃらに働く深夜残業の日々が続いていた。そんな心が擦り切れそうになる時に、助けてくれたのは写真だった。

「週末になるとバイクで房総半島や伊豆半島に旅して、写真を撮っていました。夏はサーファー、春、秋、冬は花畑や露地栽培の風景や働く人の姿など。そのうち南房総の地元の人と仲良くなって、写真を地元のパンフレットに使わせて欲しいと頼まれたり。地元の人が当たり前に見ている、でもとても美しい風景を写真に収めてポストカードを作ったらとても喜ばれたんです。宿泊施設からは、全ての部屋に電話を設置しているからポストカードは流行らないと言われたんですが、写真の魅力で買ってもらいたいと無理を言って置いてもらったら、とても売れて様々な施設からオリジナルのものを作りたいと。そんなこともあって会社を辞めて写真家としてやっていくことを本気で考えました」

撮り貯めた写真で銀座と大阪のキヤノンサロンで個展を開くことになり、仕事でお付き合いのあったとても著名なデザイナーの先生に、一度作品をみせてごらんと言われて持って行ったのだが、そのときに言われた一言。

「君は不感症だね」。

その後の川廷の働き方、生き方を大きく変えることになった一言だった。「君が何に美を見出して写真を撮っているのか僕には何も伝わってこない。何も感じない。きっと君は不感症なんじゃないか?写真はお金もかかる。この程度の写真なら辞めて会社の仕事に集中したほうが良い。しかし、もし本気で写真をやりたいなら学校に行って一から勉強し直したほうがいい」

写真家としての未来を本気で考え始めていた川廷にとってはとてつもなく大きなショックだった。時を同じくして、関西支社への転勤が決まっていた川廷は、一念発起し大阪写真専門学校(現ビジュアルアーツ)夜間部の入学願書をすぐに取り寄せ門を叩いた。

「上司からは舐めてるのかと怒られましたね(笑)。『仕事はちゃんとやります!』と約束して。夜6時から9時までが夜間部の授業の時間でした。もちろん全部の授業が受けられる訳ではなかったのですが、例えば、月曜日の写真家の哲学、水曜日の暗室ワーク木曜日のスタジオワーク、これだけは行こうと決めました。職場と学校が近かったので、18時になれば授業を受けに学校に向かって、そのあとは夜の繁華街などで先輩や取引先のみなさんに合流して営業活動や情報共有したり。最初は怒っていた上司も認めてくれて。大変だったけど2年間通い、夜間では首席卒業しました」

Kawatei Photo Gallery

「憧憬　1994」

「松韻　2009」

「人工林の美、林業の現場　2011」

「湘南の老漁師の引退　2010」

「Boy's summer　2009」

「君は何者？」の答えを探す日々

　専門学校時代、ことあるごとに言われていた言葉が「君は何者？」だった。「自分は何者か」を語ることができない者には写真は撮れない。「不感症だ」と言われた意味はここにあった。
「君は何者？」の答えを探すため、自分探しのために撮り始めたのがふるさと、芦屋の風景。空き地や公園で遊ぶ少年たちを捕まえては写真を撮った。少年の頃は海でよく遊んでいたが、埋め立てられ新しい町が生まれたことで、海に対する喪失感を持っていることも振り返ることができた。
「不思議なことに、少年たちの写真を見た人から『これはあなたですか？』と聞かれたことがあります。被写体を通して自分を撮っていたんですね」
　そして、川廷が「憧憬」と言うタイトルで、少年の町の写真展を東京と大阪で開いた数ヶ月後の1995年1月、兵庫県の淡路島北部を震源として、M7.3の阪神・淡路大震災が発生。
　当時の地震災害としては戦後最大規模の被害を出し、芦屋市も震度7、犠牲者444人、家屋の全壊・半壊約51%という甚大な被害を受けた。川廷自身もタンスの下敷きになり、近所でも多くの死者が出た。
　芦屋のみんなの思い出や、川廷の少年の町は壊されてしまった。それでも写真をと考えて被災地となった生まれ故郷を撮っていると、後ろからポカーンと頭を殴られ、「フィルム抜け」と怒鳴られた。自分も被災したと言っても、「おまえが撮ったのはわしの家や」と怒鳴られ、謝るしかなかった。どうしようもない無力感を覚えた。
「写真って何だろう。写真を撮るってどういうことなんだろう。すごく悩んだ。そんなとき、水道管が破裂している道路があったんです。溢れ出す水に西日が当たっている風景。言葉にできない今の気持ちを託して写真を撮っていると、通りがかった家具を運んでいたおじさんがぽつりと話しかけてくれたんです。『あなたのやっていることは正しいと思います』と。きっと単身赴任のサラリーマンだったのではないかな」
「ありがとうございます」と立ち去る背中に言いながら川廷は涙が止まらなかった。写真家を志す自分、この町で育ってきた自分にしか撮れない写真がきっとここにある。破壊された町を歩いていると疲れてしまうので、ふっと気がつくと芦屋の黒松に囲まれた公園に立っていたこともあった。心地よい風の匂い、松韻、生命を感じさせる力強い根が地面に張っている。自分にとっての写真とは、「いま目の前にある風景によって地域の記憶を記録すること」おじさんの一言で迷いが吹っ切れた。
「落ち込んでいる場合じゃない。復興を撮らなきゃ」
　来年咲く桜に希望を抱くことができるよう、撮影する前から「一年後の桜」と題してイメージを膨らませた。そして1998年に写真展を開催。いままで壊されてしまった町をうつむいて歩いていたが、桜を見上げることによって、復興していく町を希望を持って撮れるようになっていった。そして震災から10年の節目である2005年に写真集「一年後の桜」も出版した。地元の全ての新聞にも取り上げられ、被災前後のそこに住む人々の心の移ろいを表す写真集として評価された。

「環境の川廷」と呼ばれて

　芦屋に帰り自分の原点を思い出した川廷は、再び東京勤務となり、自分らしくありたくて「海のある暮らし」を求めて湘南に移住した。
　第3回気候変動枠組条約締約国会議（地球温暖化防止京都会議、COP3）で採択された「気候変動に関する国際連合枠組条約の京都議定書（英:Kyoto Protocol to the United Nations Framework Convention on Climate Change）」、いわゆる「京都議定書」が発効され、地球温暖化を抑制するため、日本は2008年から2012年の間に温室効果ガスの排出量を1990年にくらべて6%削減することが目標として義務付けられた。
　この目標を達成するため政府の地球温暖化対策推進本部は京都議定書目標達成計画を作成。この計画の中で、国民に向けた情報提供、地球温暖化対策の普及啓発を目的として、経済界と協力して進める大規模な国民的運動として2005年に「チーム・マイナス６％」が立ち上がり、川廷は博報堂の業務としてそのプロジェクトに携わることになった。
「今まではどちらかというと仕事は仕事、プライベートはプライベート、と切り分けて考えていたんですね。それが湘南に移り住んで、『チーム・マイナス６％』の仕事に関わって、地球温暖化の問題は仕事というよりも一人の人間として使命感を持って取り組むべきだと思うようになりました。地球に生きる人間として危機意識を伝える使命があると。オンとオフが繋がった瞬間でした。海で無心にサーフィンしている時以外は全部オンだなあと（笑）」
「博報堂」という大きなブランドの中で自分のアイデンティティを確立するのは並大抵のことではない。ましてや「地球温暖化、環境問題」は企業としても社会としても未知の領域で、社会的イシューになると考えている人もまだ少数だった。
　しかし当時の上司がその可能性に気がつき、川廷に社長プレゼンの機会を作った。そこで面接のようなプレゼンを行なって道が拓けた。
「誰もやったことのない領域で旗を掲げていくのはやっぱり大変でしたよ。『地球温暖化、環境問題で飯が食えるのか！』とか、『あいつはいつも講演とかで忙しそうだけど何やっているんだ？』と言われたこともありました（笑）。でも、企業のブランドを背負うという力みではなく、地球に住む一人の人間として仕事を考えるようになったことが逆に自分のアイデンティティになっていきました。」
　2010年には、名古屋国際会議場で「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」が開催された。博報堂の業務で、日本政府の公式映像の制作業務を競合プレゼンで勝って、川廷のネットワークでチームを組んで渾身の映像作品を作った。当初はオープニングの１回だけ上映するという話だったが、各国の政府団から好評で２週間の会期中ずっとモニターから流れることになった。
　そして、生物多様性というキーワードの理解浸透が国内課題でもあったため、日本国内のNGO/NPOのネットワークである「生物多様性条約市民ネットワーク」にも参画し学びながら活動もした。その中で、「教育とコミュニケーション」の決議があることがわかり、市民社会のメンバーから、「これはあなたの本業の力を発揮して提言をして欲しい」と相談をされる。
「結果から言うと、全く経験のないことでしたが、COP10の本会議では唯一となる日本のNGOスピーチを成功させ、修正決議を引き出すことができました。

「白杭の季節　2004」

決議への提言は、通訳を介すると本意が伝わりにくいので、英語のスピーチが必要だということで、素案に対してどのような提案を行うか日本語で原案を作成し、ネットワークのみなさんに相談して完成させたものを、英会話に数ヶ月通い、先生と深く対話して英語に意訳した文章にしてもらって、そのスピーチトレーニングを受けました。さらに、NGOスピーチのためには参加国の賛同が必要だということで、会議場では各国の政府団へのロビーイングも経験しました」

このように、川廷は一つのテーマに対して、企業人としてできること、非営利活動としてできること、複数の視点で思考し行動することが成果を引き出すことになるという体験をしたことが、その後の生き方に大きく影響したという。

さらに写真家としての視点がこれに加わる。1996年に湘南に引っ越してから撮影に取り組んだのは、鵠沼海岸に夏の海水浴シーズンにだけ現れる「白い杭」。これは海水浴場とサーフィンエリアを仕切るもので、ライフセーバーの監視台も立つ。温暖化や開発によって砂浜が影響を受けている現状や、夏らしい気候が毎年目まぐるしく変化している中で、少年時代の夏休みがいつまでも続いて欲しいという思いも込めて「白杭の季節」と名付けた写真展を2004年に全国のキヤノンサロンで開催し、2007年には写真集も出版した。

続いて、仕事で知り合った、日本で最初に国際森林認証FSCを取得した三重県の速水林業の速水亨代表と懇意になり、3年かけて速水林業の仕事を撮影して、「人工林の美、林業の現場」という写真展を2011年に全国キヤノンギャラリーで開催した。このシリーズは会社の業務と写真家の活動が初めて一つとなったものだった。企業人と非営利活動、そして写真家で育んだ視点や感性を加えた3つの視点を持って行動するようになっていった。ちょうどその頃、博報堂フォトクリエイティブOBの写真家からの推薦もあり公益社団法人日本写真家協会の会員になった。

このような流れで、気候変動、生物多様性、森林保全などの環境アクションに取り組み、さらに2011年の東日本大震災によって、東北大学の先生方や環境省、そして地域の方々とグリーン復興をテーマに活動し、各地で自然資源を大切にした復興に頑張る人々をサポートしてきた。その中でも、南三陸町の林業と漁業の国際認証取得に関わりプロジェクトを立ち上げ、現在もサポートを継続し、とても多くの学びも得ている。そして2012年、CSRグループに異動した頃に出会ったのがSDGsだった。

SDGs国内普及を目指して

2012年6月、ブラジル・リオデジャネイロで「国連持続可能な開発会議」（「リオ＋20」）が開催された。次の世代が住みやすい世界を残すために、世界中から各国の代表や民間の人々が集まり、環境や貧困，災害など多くのテーマについて話し合われた。この「リオ＋20」で、「ポスト2015目標」つまり現在の「持続可能な開発目標（SDGs）」についての活発な議論がスタートしたのである。

「当時、私はCSR部長として広告会社のCSRについて整理していたところでした。CSRは企業の社会的責任（=corporate

social responsibility）であり、本業でこそ責任を果たすものと考えていたので、当時の主流であった「貢献」という捉え方だと社会や環境のテーマ毎にコミュニティができてバラバラに活動しているように感じていて、CSV (Creating Shared Value)という言葉もありましたが、環境保全、社会的包摂、そして何よりもビジネスの本業を合わせて俯瞰して捉える仕組みがないことが課題だとおぼろげに感じていました。そんなとき、「リオ＋20」でSDGsの話が始まり、直感的に『これだ！』と思ってアンテナを張り巡らせました」

現在、日本におけるSDGs研究の第一人者として知られる慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科の蟹江憲史教授に会いに行ったところ、SDGsの国内普及に向けて企業のカウンターパートを探していたこともあり、川廷のミッションは一気に「SDGsの国内普及」へと舵を切ることになった。

「2015年のSDGs採択時、国連本部のビルにプロジェクションマッピングで映し出されたSDGsアイコンを見て、これは『世界の共通言語』になるコミュニケーション・ツールだと強く感じました。そこで、日本におけるSDGsの普及・啓発を担う国連広報センター（UNIC）の根本かおる所長を訪ね、『SDGsアイコンの日本語版を制作しましょう！』とご提案し、博報堂のコピーライターの井口雄大とボランティアで制作したんです」

「SDGsは、人と地球がこれからも繁栄を続けて行くために必要な、私たち一人ひとりの行動計画です。そこには、一人のアクションを、みんなの幸せにつなげていく、具体的な方法が書かれています。SDGsの日本語版には、日本で生活する一人ひとりにとってSDGsが当たり前になってほしい、という想いが込められているんです」

「各ゴールを表すわずか2行の言葉の中に、169ターゲットの言わんとする内容を落とし込むには、どうしたらよいか。コピーライターと169ターゲットをじっくりと丁寧に読み込み、1つ1つの目標を日本語として端的に言い表すことを心がけました」

そして、すべてのセクターにとって使いやすいように、UNICの根本所長の熱意でセッティングされた国連関係機関、NGO、JICA、外務省、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンのみなさんと協議を重ね、2016年3月に公表したのが「みんなで使える、みんなのためのキャッチコピー」である。

さて、冒頭で記したハイレベル政治フォーラム（HLPF）の話に戻る。日本政府は2017年に初めて自主的国家レビューを行うことになり、博報堂が外務省から業務を受託し川廷はチームを組んで対応した。そして、政府メッセージの官民連携でSDGsを推進することを表現するために、外務省の職員のアイデアで「Pabric Pribate Action for Partnership」=PPAPがキーワードになった。世界で１億回も視聴されたピコ太郎さんにSDGsのメッセンジャーになってもらう企画である。政府のレポートや映像の制作と合わせてピコ太郎さんの「PPAP SDGsバージョン」などパフォーマンスもサポートする機会を得たのだった。

会議では岸田外務大臣（当時）が発表を行い、質疑応答があった。その回答を日本語で行なったため、川廷もその場で本質を理解できた。簡単にまとめると、『日本社会も持続可能性に課題があり、その解決をする方法を探り、その成果を世界

「『デザイン思考でSDGsに挑む』2018/12/5 観世能楽堂」

「UNDP（国連開発計画）本部にて 2019/7/17 」

でも発揮できるようにする必要がある』ということだった。ということは、次は官民連携による成果を政府ではない立場の人間が国連で発表する必要があると思い至ったのである。

国連は4年に一度中間チェックを行うことがわかっており、川廷はそこをターゲットと考え省庁のキーマンとも考えを共有した。つまり2019年のハイレベル政治フォーラムでの発表である。

神奈川県のSDGs推進担当顧問 へ

SDGsが縁を呼び、地元湘南を擁する神奈川県から声をかけられたのが2017年の年末のことだった。神奈川県は、2018年の「SDGs未来都市」の選定に向け、黒岩知事をトップに県一丸となって取り組めるキーマンを探していた。県庁職員は、知事の求めるSDGsを具現化できる人材を探し、川廷に行き着いたという。

「2018年2月に県庁大会議場で行われた「SDGsフォーラム」で基調講演をさせていただきました。知事、幹部職員、有識者が集まる実質的なキックオフの場でした。終了後、知事から『僕が求めるSDGsだ』と握手を求められました。その後、山口健太郎理事（いのち・SDGs担当）から初対面の打ち合わせで顧問の委嘱を打診されたのですが、自己紹介したらサーファーで意気投合（笑）。理事室で数分話しただけで波長が合うと思いました。地元の県から委嘱されるのは名誉だと思い、会社にもその意義を報告してお受けしました」

「初めての顧問ミーティングで、多くの資料を使って説明を受けたのですが、最後までわからなかったのが県庁の役割でした。そこで、県庁から会社に向かう電車の中で『かながわSDGsフォーメーション』という構造図を考えてすぐに共有しました。これが今もかながわSDGsのベースになっています」

このフォーメーションを具体化するために、地域フォーラムなど開催しツールを制作し一つひとつ進めていった。その大きな成果のひとつという形で、全国でも有数のSDGs先進県として、2019年 1月にSDGsを共通の目標として自治体同士の連携を深めるための「SDGs全国フォーラム2019」を企画した。

この「SDGs全国フォーラム」の開催こそ、川廷が描いていた政府ではない立場の人間が国連に成果を持っていくためのとりまとめの場だったのである。その成果を見える形にするため、「SDGs日本モデル」宣言の文案をとりまとめ、来賓で出席した片山さつき大臣に承認してもらうことができた。政府方針を受けて自治体が主体的に呼びかけて官民連携を促進する。この大きな単位で日本が一丸となってSDGsに取り組もうという意志を形にした。パシフィコ横浜で開催されたフォーラムには、1,700人を超える応募があり、急遽サブ会場を設けて450人の定員枠を大幅に拡大し計1,215名が来場。日本におけるSDGsの普及に向けた大きな一歩となった。

「ポートフォリオワーカー」という生き方

軸足は博報堂での本業に置きつつも、非営利団体、写真家として写真展の開催など、川廷は自分らしい生き方を模索し続けてきた。
「会社で得た私のスキルを社会や地域が必要としてくれて、人づてにネットワークが広がってきました。常に自分の生き方を見つめて行動していった結果、今で言う『パラレルキャリア』を積んでいるのだと思います」
リンダ・グラットン教授（ロンドンビジネススクール）が、未来の働き方を描いた著書『ライフシフト（Life Shift）』はベストセラーとなった。この著書の中で教授は「時間や場所の制約に捕らわれず、複数の仕事を同時平行的に進める働き方が主流になる」と述べ、それを「ポートフォリオワーカー」と名付けている。
川廷は、今や日本のSDGsの第一人者の一人として全国から講演に引っ張りだこ。多くの自治体や非営利団体のSDGs顧問なども引き受けており多忙な毎日だ。複数の仕事を同時並行的に進め、そこに本業と社会活動という区分はなく、全てが相互に関連し合った働き方。もはや、川廷は日本における「ポートフォリオワーカー」のモデル的存在になりつつある。

SDGsな自宅で「海のある生活」

川廷は、茅ヶ崎の雄三通り沿いに日本初のFSC認証（Forest Stewardship Council）を取得した家を建てた。日本で最初にFSC認証を取得した速水林業のヒノキ、復興支援の象徴としてFSC認証の取得をサポートした南三陸。その山主と一緒に切った南三陸杉。山梨県有林のFSC認証のカラマツ。認証材以外は全て出荷証明書を取り寄せて、どの産地で誰が関わっているのかがわかる管理木材だけを購入。FSC認証とは、木材の生産・流通・加工が、環境・社会・経済の持続可能性に配慮されていることを証明する国際認証で、川廷の自宅はまさにSDGs12「つくる責任　つかう責任」を具現化した家である。

「この家は、人任せにしない家づくりを標榜する近所の工務店ホームスィートホームメイドに建ててもらいました。屋内の壁はほとんど漆喰なのですが、Facebookで仲間に呼びかけたら55人（お子さんを含む）が駆けつけてくれて、みんなに塗ってもらいました。全員の写真を撮ってプレゼントしましたが、全員が素敵な笑顔なんですよ。建てた後にもたくさん

の方が集まってくださるので、家とともに成長をしている実感がありますね。『南三陸杉は潮風で育った木だから、湘南の外壁にまさに適材適所だよ！』と南三陸の森林組合長に言われたので、その通りにしました。時が立つほど色も変わるし、割れてくる。それが経年"劣化"ではなく経年"優化"なんだなあと実感しています」
インタビューの最後、川廷は日焼けした笑顔でうれしそうに語った。
「自宅正面の浜はサーファーも少なくて、とってもローカル＆メローな雰囲気。自宅に居ながら海の別荘気分になれるんですよ。波があってもなくても自転車で浜まで行って波乗りしています。先日、台風のウネリが入ったときは頭サイズの波に乗れて最高に気持ちよかったです。クタクタになりましたが、まだまだ筋肉を付けて楽しみますよ（笑）。土曜日は、朝8時から近所の『海辺の朝市』にもほぼ毎週のように行ったり、もちろん、この雄三通りや海の表情を撮影したり。最近撮影した写真を、仲間が運営している茅ヶ崎のローカルメディア「エキウミ」の写真ギャラリーに提供しました。『海のある暮らし』を満喫しています」
川廷は今日もロングボードを自転車に積み、鼻歌を歌いながら大好きな海に向かう。

この原稿を仕上げたあと、川廷から一報があった。それは川廷自身が神奈川県の顧問として国連総会のサイドイベントでスピーチすることになったというのだ。知事も県庁幹部も議会中のため出張できないので、顧問で民間人の川廷にその期待が託された。

「COP10の時に組んだ英会話の先生と9年ぶりにタッグを組んでスピーチに挑みました。今回は、僕の普段の講演を聞いてもらっていたので、スピーチで話したい内容を一緒に整理し、僕が英語を駆使できればこんな単語を使ってアピールするだろうとキャラクターを明確にした原稿を作成しました」

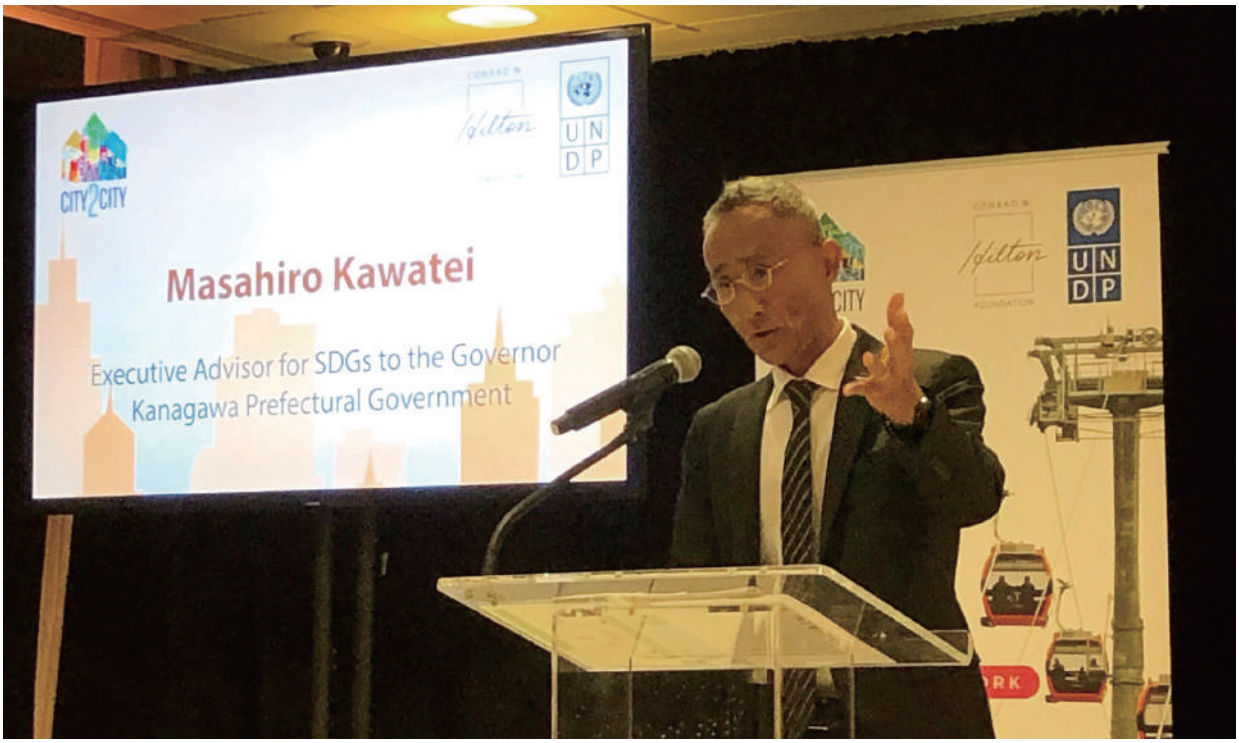
そして、現地時間の9月26日の夜、国連本部の４階にあるダイニングルームで「MAKING CITIES FOR ALL」が開催された。これは、国連開発計画(UNDP)主催によるSDGsのローカライジングをテーマにしたサイドイベントで、ドバイ、バングラディシュ、ニューヨーク市、ロサンジェルス市などが取り組みを発表する中、川廷が英語でダイレクトに提案を行ったことが狙い通りインパクトを持って迎え入れられ、神奈川県がさらに注目され新たな動きが出てきたそうだ。スピーチに反響があったのは一つひとつを丁寧に伝えることを心がけたからではないかという。スピーチの中で川廷が特に思いを込めた部分について聞いてみた。

「普段の講演で次世代への責任を必ず語るようにしています。それは『きれいごとで勝負できる社会をつくる』です。『きれいごと』は今までは揶揄すること、からかうことでした。しかしSDGsが言っていることは全て『きれいごと。』つまり『きれいごと』という日本語を具体的に行動することに意味を変革しなければ、次世代への責任は果たせないと説明しています。これを英語で言うのは難しいので、今回はこのように呼びかけました。『We cannot betray Greta Thunber, we cannot betray next generations anymore ! Show that local governments can actually change the world by involving both private sectors and public sectors.』（我々はグレタを裏切れない、次世代を裏切れない、これ以上！官民を巻き込むことで本当に世界を変えられることを自治体が示そう）これは、グレタ・トゥンベリさんが国連総会のスピーチで言った『betray（裏切る）』に対する大人世代からの応答も合わせた僕の思いとして英語に託しました。動画がYoutubeにあるので見てくださいね」

最後に、今の心境を川廷に尋ねてみた。

「階段を上がっていくと、視野が広がり新たな発想が生まれます。だからさらに階段を上がるエネルギーが湧いてきます」

（了）



川廷 昌弘（かわてい まさひろ）

兵庫県芦屋市生まれ。1986年博報堂入社。テレビ番組「情熱大陸」の立ち上げに関わる。地球温暖化防止国民運動「チーム・マイナス６％」でメディアコンテンツを統括。環境省SDGsステークホルダーズ・ミーティング構成員。グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンSDGsタスクフォース・リーダー。神奈川県顧問（SDGs推進担当）。鎌倉市SDGs推進アドバイザーなど委嘱多数。また、公益社団法人日本写真家協会の会員として「地域の大切な資産、守りたい情景、記憶の風景を撮る」をテーマに活動する写真家でもある。

深海への挑戦、探索の歴史
相模湾の深海をのぞこう!学ぼう!

2019年8月4日(日) 13:00〜15:00
みんなのSea-Side(株式会社Be-Side内)

満員御礼!無事開催致しました。
講師の山田海人先生をはじめ、暑い中ご参加頂きましたみなさま、本当にありがとうございました!
みんなで深海映像をみたり、海からのおくりもの"テングサ"をつかった手作りおやつをいただいたりと、少しでも深海を身近に感じて頂けたら幸いです♪ (みなつ)

みんなで弾いて歌って楽しく学ぼう!
江の島でだれでもウクレレ体験

2019年8月11日(日) 13:30〜16:30
国家公務員共済ホテル「ＫＫＲ江ノ島ニュー向洋」

初めは恐る恐るウクレレに触れていた方も、とみ〜斉藤(斉藤 富彦[Tomihiko Saito])先生から弾き方を教えてもらいどんどん上達!誕生日の歌やハワイアン曲などをいっしよに合奏し唄いながら和やかな雰囲気で終えることができました。江の島東海岸での合奏もとても楽しかったですね。善行アロハウクレレサークルのみなさま、ありがとうございました。 (片山久美)

BLUE Flagセミナー 入門編 〜国際環境認証ビーチ『由比ガ浜』を事例に〜

2019年8月10日(土)14:00〜17:30 由比ガ浜海水浴場

由比ガ浜海水浴場がアジア初のブルーフラッグを取得してから４年。取得に至るまでどのような思いや苦労があったのか。8/10(土)、認証団体であるFEEJapan、申請団体である鎌倉市、由比ガ浜茶亭組合の３者が一堂に会し、文教大学と湘南VISION大学共催のもと開催、30名以上の方にご参加い頂き大盛況でした!
パネルディスカッションでは、「環境教育っていうとハードルが高いけど、『ブルーフラッグってカッコいいよね』みたいなライトな入り方をすれば敷居も低くなるし、賛同者も増えるのでは」といった意見も。
その後はみんなで海水浴場に出て「ごみ分別エコステーション」や「ボードウォーク」を現地視察。間近で見た本物のフラッグはとっても大きくてびっくり。水陸両用の車椅子には実際に乗車体験もさせてもらい、水質調査の方法もライフセーバーの方々からご説明いただきました。 (片山清宏)

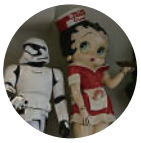
Night Golf in 由比ガ浜海水浴場 〜真夏の夜、幻想的な海でゴルフをしよう!〜

2019年8月17日(土)19:00〜21:30 由比ガ浜海水浴場

夜のビーチは星も月もきれいで、心地よい風が吹く絶好のコンディション。LEDライトが内蔵されたゴルフボールが夜空に舞い、的に当たると大きなかぼちゃ(笑)がピカピカ光り、スペイシャルゲームではTシャツやバックなどの豪華賞品も当たりました!
同じ会場の海の家パパイヤでは Def TechのMicroさんのMusic Liveが開催され、200人以上が参加!
Night Golf後は、私たち「湘南VISION大学」スタッフがリードして、Def TechのMicroさんもご一緒に参加者とビーチクリーン。「来たときより海をキレイにして帰る」。そんな環境に優しいイベントにもなりました。GDO様、湘南WorK.様、本当にありがとうございました! (片山清宏)

Information

let's have fun!
配布・設置していただける場所を募集しています



藤沢スマイル歯科医院

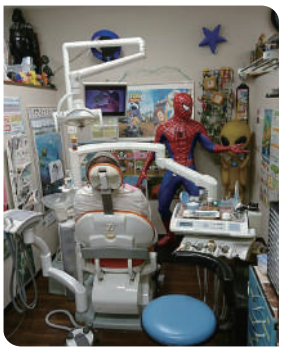
いたくない！小児歯科から歯周病治療。入れ歯治療まで

AD

スタッフ募集　笑顔あふれる新しい職場

【募集要項】若干名　　【交通費】全額支給（車通勤OK!）
【待遇充実!食事代補助】　　【設立】2008年
【科】一般、小児、矯正、審美、予防、ホワイトニング、歯周病治療、顎関節治療
【休】完全週休2日制（水、祝、他1日）※祝日週の振替診療なし
【就業時間】（月火木金）10：00〜20：00　（土日）10：00〜18：00　各日休憩90分
【他】夏季5日　冬季5日

トレアージュ白旗2F医療モール（小田急江ノ島線　藤沢本町から徒歩5分）
無料大型駐車場あり
HP　http://www.fujisawa-smileshika.jp



映画と本とパンの店 シネコヤ CINEKOYA

●店舗概要：
TEL0466-33-5393
藤沢市鵠沼海岸3-4-6
営業時間9:00〜
定休日／木
アクセス／鵠沼海岸駅より徒歩3分

最近、お客様から言われたことで、一番うれしかったこと。
「シネコヤがあるだけで、なんか安心する」と。
いつか、鵠沼のシンボル的な存在になれたらいいな、と思っています。
嬉しいことに近ごろ遠方からのお客様も増えてきて、
「シネコヤがあるから、近くに越して来たい」とか、
そんなことを言われると嬉しいなぁ、やっててよかったなぁ、なんて思います。

2017年に公開されてからロングランヒットをつづけている『人生フルーツ』（2016年／日本）の建築家 津端修一さんが、映画の中でこんな話をしていました。
「風の通る家造り。それがわたしの生涯をかけた仕事だったわけです。」
田畑を耕し、庭に小さな雑木林をつくる…妻に支えられ、家族を巻き込み、その生活そのものが、彼の生涯をかけた仕事だった。
そう考えるとなんとも幸せな生き方だなぁと思います。

生まれ育った街、藤沢で仕事ができることは、この上ない幸せと思います。
まして、自分の好きなことをやらせてもらい、
「安心する場所」と言葉をかけてもらえることは、
ほんの少しでも私を育ててくれた藤沢の街に、人たちに、
恩返しができたのかな、
と思う瞬間です。
そんな幸せなことはないと思うのです。

コミュニティの中で、どう生活するか、どう仕事をするか、どう生きていくのか、そんなことを考えながら、日々「生涯をかけた仕事」に取り組んでいます。

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.24
2019.08

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：片山清宏
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：片山清宏　片山久美
郷渡美夏

web http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org